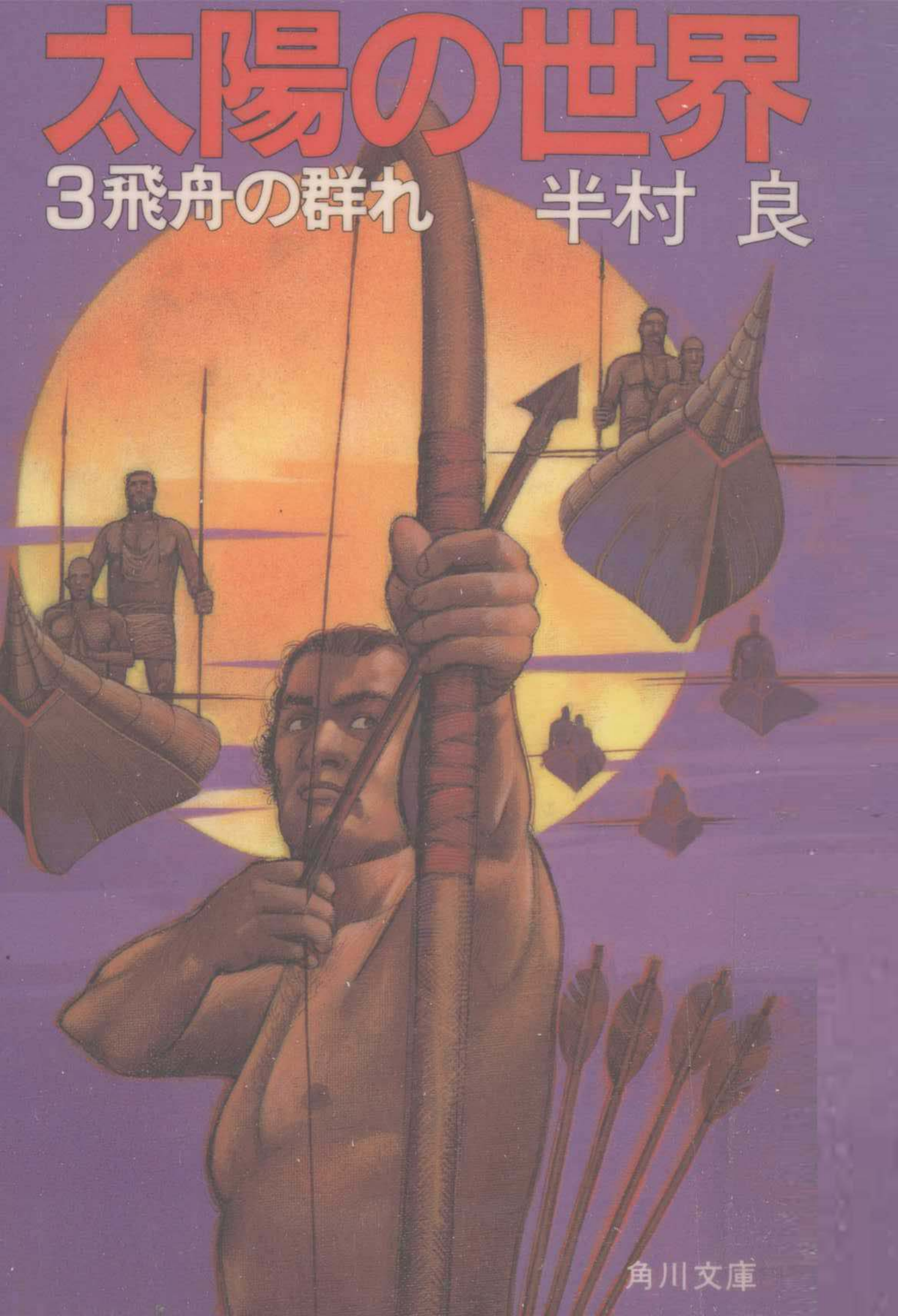


太陽の世界

3飛舟の群れ

半村 良



角川文庫

太陽の世界 3

はんむらりよう
半村良



角川文庫 5560

昭和五十八年十二月十日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話東京二六五―七二二一(大代表)

千一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——大日本印刷 製本所——本間製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

ISBN4-04-137553-3 C0193

太陽の世界 3

飛舟の群れ

半村良



角川文庫 5560



遠い昔、ムーと呼ばれる大陸があった。ムーは海中に没した。

カラー口絵
本文イラスト

磯野宏夫

象形文字

横尾忠則

第一章

1

南の海へ向かつて吹く乾いた風のために、草原は波うつように見える。緑色の波だ。その緑の波の彼方^{かなた}には薄黒い山塊^{さんかい}が望める。山塊は北から東へながながとつらなっており、東の端には噴煙^{かんえん}をあげるふたつの火山が見えていた。

アムとモアイが仮営地を出てその草原にわけ人ってから、すでに二百日近くが経過している筈^{はず}であった。そして彼らは、その二つの火山をようやく自分たちの目でたしかめ得る位置にまで辿^{たど}りついたところだった。

草原はそれほど広大であった。その上、危険この上もない土地であった。

草原の旅の大半^{たいはん}は、人間の背丈を越し、その姿を包みかくしてしまふ草の中であり、草がやや低くなつた所でも、草は人の体のなかばをかくしていたのだ。

丈高い草の中には温和^{おんわ}な草食獣が無数にかくれ棲^すんでいたが、同時にそれらを餌^{えき}とする兇暴^{げうぼう}な肉食獣の数も多かった。牛人イミルの片腕を奪った獅子^{しし}も、その草原で殺戮^{さつりく}を行なうも

ののひとつだったのである。

丈^{たけ}高い草にさえぎられ、血に飢えた猛獣の忍び寄るにまかせるしかないそのような場所へわけ入るのは、まったく無謀なことであった。しかも草原は広大であり、東の山地へ到達するには三百日近くもかかってしまう。八百人のアムと百人のモアイが、誰^{だれ}一人傷つくこともなくこの大草原を横断することは、不可能であるように思えた。

しかしアムには類^{たぐ}いまれな知恵と勇氣があり、モアイには神秘な力があつた。

アムの族長はまず、草原に火を放って草を焼き、ひらけた進路を確保することを思いついた。獣たちはその火を恐れて遠くへ逃げ散ってしまふだろう。人々に武器を持たせ、草を焼きひろげた所を進ませれば、猛獣に不意を衝^つかれることもなく、接近されても追ひ払うことはたやすい。

草を焼く者は一日以上先行しなければならぬが、その者たちの安全を確保するには、モアイの力が役立った。

族長は先行する者のために小さな筏^{いかだ}を作らせた。草原を渡るための筏である。その筏は横^{そり}のように引いて運ばれ、必要な時にはつき従った数人のモアイが合掌^{がつしょう}して宙に浮かせた。筏には長い槍^{やり}を持った勇者が乗り、草の上に浮いて近くにひそんでいる敵を発見し、追ひ払うのだ。モアイが合掌している間、別の勇者たちがその周囲に立って護衛している。モアイはそのとき立ちどまっていなければならぬわけではなく、ゆっくりとだが歩を進めることがで

きた。

また、草に火を放つ場合でも、モアイは火のついた松明を自由自在に飛行させることができたから、野焼きの際の危険は殆んどないに等しかった。

こうして、毎日のように草原の上で筏が浮き動き、松明が飛びまわって火を放ち、草は風下へ燃えひろがって人々の進む道をきりひらいた。

アムの行列が通過したあとには、幅広い焼け野が残り、筏を浮き動かすことに慣れたモアイたちは、その筏を素早く移動させることができるようになり、乗った者がその速度にまけて振り落とされることのないよう、しっかりと体を支える部分をつけ加えねばならぬほどになった。

はじめ、そろりと宙に浮いて草の中に身をひそめた猛獣を発見し、追い払うただけに用いられた筏は、その有益さが認められて用途をひろげ、何人か一組になったモアイが分散して中継することにより、前衛と本隊の連絡に使われたり、水や食料などの運搬に利用されたりもするようになった。

そうになると、ただ一つの筏では不自由を感じるようになり、人々は丈高い草を刈り、それを束ねて舟の形にして用いはじめた。

何艘もの草の小舟が彼らの頭上を往来し、猛獣を威嚇して追い払い、獣を追いつめて捕えた。

それはこの草原の旅で身を守り、人々を養って行く上で絶対に必要なことであつたが、モアイたちの心を昂揚^{こうよう}させ、なかば怠惰^{たいだ}に眠っていた彼らの力を、はつきりと目ざめさせるのに役立^{やくだ}つた。

筏や草舟の飛行速度は日ましに速くなり、急停止や微妙な上下運動も自在になつて行つた。はじめ五人がかりだつた筏の移動は三人ですむようになり、草舟を一人で操れるモアイも出てきた。筏や草舟を中継することも巧みになり、しかも彼らの力が及ぶ半径が目に見えて増大して行くのだ。

モアイたちは、アムの若者が勇者の地位をめざして狩りの技^{わざ}や力を競い合いみがき合うように合掌^{キッパ}による力を競い、みがき合うことによるこびを感じているようであつた。

そのことは、はじめのうちいささか鈍重だつた彼らの日常の立居振舞のすべてを、アムの人々に劣らぬほどしやつきりとしたものにさせ、瞳^{ひとみ}にまでいきいきとした光をたたえさせはじめるのだつた。

「草原^{クチャヌ}をこのように続けて焼き進む必要はないのではありますまいか」

或^{ある}る日族長にそう提案したのはイルであつた。振り返れば草原の中にながながと焼けひろげた道がつらなっている。

「どうしようというのだ」

族長が尋ねた。



「舟にする草はいくらでもあります。もっとたくさん草舟をこしらえて前の草原を飛び越えればよいと思うのです」

「なるほどな」

族長は微笑してイルをみつめた。

「しかし、どこまでも飛んで行けるといふわけではあるまい」

族長はどうやらイルをためしているようであった。イルの提案のすべてを悟った上で尋ねているのだ。

だがイルはそれに気付かず、小石を拾って地面に線を描いて熱心に説明した。

「草を焼き払った安全な場所を少しずつ作って、そこには勇者に守られたモアイを何人かずつ置くのです。そして、そのずっと向こうに、大きな場所を作れば、人々は草舟に乗って今までよりずっと楽に、そしてずっと遠くまで行けるのです」

「イルよ」

族長はイルをみつめて言った。

「それはとてもよい考えだ。実を言うと僕も少し前からそのことを考えていたのだ。よくそのことを思いついたな」

イルはうれしそうに族長をみつめ返した。

「だが、それにはひとつだけむずかしいところがある。一族をモアイの力による草舟で先

に運ぶとして、最後に残る中継ぎの者をどうするか、だ。中継ぎの場所が余り近いようならば、今までのように草原を焼き続けたほうが手間がかからぬぞ」

「そのことです」

イルは大きく頷き、待たせていたモアイの一人に手をあげた。するとモアイは、小さな草舟を引いて二人のそばへ来た。

イルはその草舟に入って坐ると、

「族長よ、ごらんください。我らモアイにはこのようなこともできるのです」と合掌した。

見る間に草舟は、それに乗ったイル自身の力で浮きあがった。

イルはすぐ草舟を地におろし、慚じるように言った。

「密林の谷底で、我らモアイは安全な岩の上に住んでおりました。そこへあがるには、平たい岩の上に乗ってみずからを浮きあがらせていたのです。族長よ、我らモアイは今まで何という愚かしい者だったのでしょうか。谷底でのことをすっかり忘れていたのです」

族長はその言葉を聞き流すようにして、イルが坐った小さな草舟の中へ入った。

「浮いて見せよ」

「はい」

イルは合掌し、族長を乗せて草舟を浮上させると、少し走って見せた。

「おろせ」

「はい」

イルは草舟を地につけた。族長は草舟から出て尋ねた。

「一人で何人に乗せて走れるのか」

「まだよく判りません。だが、何度もやれば力は強くなると思います」

族長は厳しい声でモアイたちに自力で浮上する訓練をさせるようイルに命じた。

「モアイこそ我らの宝だ」

うれしそうに去るイルのうしろ姿を見送りながら、族長はそうつぶやいていた。

2

まずイルの草舟が偵察長のトワタを同乗させ、東へ向かってその日のうちに行きつけるところまで突っ走ると、その地点で火を放って草原を焼き払う。

翌朝、百人のモアイが百艘の草舟に乗り、アムの人々を運びはじめる。遠く離れた二つの地点で火を焚き合って目じるしとし、百艘の草舟は夜通しその間を往復するから、二昼夜ほどで全員が次の地点へ移動してしまふ。先着の男たちは獣を狩り水を溜め、無駄なく時を過ぎすのだ。草舟を駆るモアイの休養に一日あてて、一回の移動に三日をかけるが、それでも彼らの進む速度は草原を焼きひろげながら進んでいた時に較べると三倍以上になったように

ある。

或る日族長は、長老たちを集めてこう言った。

「長老らよ。我らは今日までこの草で作った舟を草舟と呼んで来た。しかし舟はもともと水に浮かんで人を運ぶ道具であって、宙に浮く道具ではない。我らがこの草舟に乗って宙を走ることが出来るのは、ひとえにモアイの合掌によるものである。しかも、モアイが宙に浮かべて我らをそれに乗せ得るのは、草で作った舟とは限らないという。めざす火山もすでに目の前に迫った。我らをこのように素早く運んでくれたモアイの力に感謝して、今より草舟という呼びかたをやめ、これをキマダと呼ぶことにしよう」

アムの人々にとって、自分にかかわる新しい言葉が作られることは名誉なことであつた。そしてそのアムの習慣に、モアイであるイルも見事にとけ込んでいた。

「族長よ、有難うございます」

イルは何度もそう言い、拍手する長老たち一人一人に笑顔を向けた。

だが、長老たちが去り、トマピと二人きりになった族長は、力のない声でこう言った。

「トマピよ、我らは貧しいのだな」

トマピは怪訝な表情で族長を見た。

「それはまた、どういふことでしょうか」

「飛舟という名を授けたことで、イルはとてうれしそうにしていた」

「はい。イルにも新しい言葉^{ワタゴト}を授けられることがどれほど名誉なことか、もう我ら同様に理解できるようになったのです」

「それはよいことだ。アムとモアイがこの上もいっそう強く結ばれるよう、儂は願っている」

「このトマピもそれは同じです」

「だが儂がこの草原^{クヤヌ}の旅で、どれ程深くモアイの力に感謝しているかは判るまい」

「……………」

トマピは何か答えかけてやめ、じつと族長の横顔をみつめた。

「飛舟^{キツネ}を操る一人一人のモアイに、儂の持つすべてを贈ってよろこばせたいと思うのだ。

モアイの一人一人が望んでいるものをすべて贈り与えても、今儂の胸^{ムネ}にあるこの感謝の気持は足りぬほどなのだ」

族長は顔を天に向けた。

「それなのに、儂はたったひとつの言葉しか与えられないではないか。儂には何もない。儂にあるのはこの杖^{カサ}と袋^{フクロ}と、そして心^{ココロ}だけなのだ」

「族長^{ナサム}はモアイに与えるための富^{トミ}を欲しておられるのですか」

トマピは叱^{しか}るように言った。族長は再び顔をトマピに向け、その目を見据^{みす}えて答えた。

「そうだ。儂は富^{トミ}が欲しい。肉のひと切れでもよい。果実^{ミカ}のひとつでもよい。この感謝を

形にあらわせたなら、儂自身どんなに満ち足りた気持ちになれることだろうか。それが形のな
い言葉だけとはな

「族長よ、お気持はよく判ります。しかし、形ある富はやがて形を失います。だが形のな
い言葉は語り継がれて滅することがないでしょう」

「それは判っている」

族長は目を遠くにやって答えた。

「草原を焼いて道を作ることの思いつき、儂は行列の出発を命じた。儂は精一杯の知恵で
この草原の旅に立ち向かったのだ。しかしトマピよ、気付いていたか」

「は……」

「目ざす火山に近づくにつれ草原の地は高くなり、反対に生い茂る草の丈が短くなって
来ていたのを」

「そう言えばたしかにそのようでしたな」

「水が少なくなつて来ているのだ。海の近くでは草にかくされたたくさんの沼があったが、
今ではもう沼などは見ることもできぬ。仮りに草原の旅のなかば以上を無事で過ごしたと
しても、儂にはその先が心配だった。それから先のことはただラに祈るよりなかった。トマ
ピよ、明日モアイの誰かに頼んで空高く昇って見るがよい。この先で草原は終りはじめてい
るのだ。そして更にその先は火山の領域らしい」